

南仏アヴィニョン・フェスティバルオフ参加公演報告

2023年7月 花柳衛菊

4年ぶり20回目のアヴィニョン・フェスティバルオフ参加公演の報告である。アヴィニョン・フェスティバルはオンとオフに分かれ、演劇、音楽、パントマイム、人形劇、ダンス等の舞台芸術祭で毎年7月に開催され、世界中からアーティストと観客を集めてきた。オンは芸術祭主催、オフは個人参加の公演である。しかし、2020年に突然のようにコロナ禍が蔓延し、マクロン大統領がテレビで、アヴィニョン・フェスティバル中止の報を伝えた。目に見えない魔の手が世界を覆い、前代未聞の不思議な出来事が、戦争も知らない自分に降りかかった。仕方なく支店の営業所を閉鎖した旅行代理店本社に電話をし、購入済のパリ行き航空券をキャンセルした。確か17万円くらいだったと思う。日本でもあらゆる公演がキャンセルを余儀なくされた。

その後、2021年からフェスティバルは再開したが、私の公演会場であるガレージインターナショナルシアターは、フランス以外の海外のアーティスト公演が主だったので2022年まで閉鎖、ようやく今年の2023年にスタートに漕ぎつけた。オーストラリアに拠点を持つシアターのプロデューサー・シャクティから再開の報を2022年暮れに受けたが、まだまだ日本ではコロナに対する恐怖感があり、身内にも感染者が出て、とてもフランスまで行く気にはなれなかった。また、ウクライナへの軍事侵攻でソ連上空は飛行機が飛べないため、南回りで20時間から30時間を掛けてフランスまで行かなければならない。そんな命を掛けた冒険のようなフランス行きを快諾してよいものか、以前は120円以下だった1ユーロが、160円という円安も頭の痛い問題であった。困難な中でも自分に与えられたチャンスを生かすべきではないか等迷いに迷い、ようやく年が明けてから渡仏を決意した。北回りのパリまでの直行便を日本の航空会社で見つけたが、2020年の約2倍の値段であった。早朝便なので羽田で1泊、新幹線TGVの発車時刻が合わずパリで1泊、結局、ホテル代も加算され、2泊3日の長く高価なアヴィニョンまでの旅となった。



アヴィニョン市の
シンボル法王庁

7月13日夜に家を出て46時間後の15日昼前、パリから約3時間のアヴィニョンに着いた。パリのどんよりとした空とは打って変わって、アヴィニョンの空はいつも真っ青だ。アヴィニョン TGV 駅を降り、懐かしいどこまでも続く青い空を見上げた。ついにまた来てしまった。しかし暑い。ホームを降りるといつも通り満面の笑顔のタクシー運転手マフィーユに抱きつかれ、彼女が宿泊先のアパートまで連れて行ってくれた。これから公演の衣裳換えの手伝いをしてくれる自費参加の花柳奈舟さんと、この2LDKでの自炊生活が始まる。宿泊用に毎年借りていたヨガ道場は先約があり、今回のアパートは2つのベッドルーム、2畳ほどの台所、8畳ほどの居間兼食事室、それに洗濯室、風呂場を備えた可愛いアパートで、1戸建てのような個性的な間取りである。椅子と白熱電球のスタンドとろ

うそく立て、重厚な家具が所狭しと家中に置かれ、壁には絵画がすき間なく飾られている。私のベッドルームは居間と繋がっているが、目隠し壁があり、稽古に使えるスペースもある。が、電話回線はない。やはりここは古式ゆかしいヨーロッパである。

アパートに着いてすぐ、徒歩 2 分の公演会場に出かけた。そこで、音源は何を持ってきた？と聞かれ、すかさず CD です、と答えたら、OH NO! CD プレーヤーはどこにもないと言う。CD プレーヤーは過去の遺物と言わんばかりだ。音源が再生できない？音のない公演？どうすればいい？明日はリハーサル、明後日は本番。何のためにここまで来た？パニックに陥ってしまった。日本から MP3 ファイルで音源をシャクティのパソコンに送ってもらって欲しいと伝えられた。東京の録音スタジオに電話をしても出ない。ダンス公演が多い夏の間スタッフは忙しいのだ。いつも機転を利かせて助けてくれる友人の広美を思い出し、彼女に全てをゆだねることにした。彼女が考えられるあらゆる所に電話とメールをし、音響スタジオのスタッフが真夜中にスタジオに行って、パソコンに保存されている音源をフランスに送る、という手配をしてくれた。フランスではまだ夕方なのに、日本は夜中なのだ。しかし、シャクティには日本語に反応するパソコンがない。広美が音響スタッフのメールをローマ字に替え、音源のアクセスアドレスも付けてシャクティにメールを送り直してくれた。シャクティは二世なので日本語が分かり、ローマ字なら受け取れる。ついに音源がプロデューサー・シャクティのパソコンに届いた。電話回線もないアパート、CD を古いというフランス。フランスの劇場に CD 再生機がないなど誰が想像できようか。私が音源を自分のパソコンで作っていたらどうなったのか、想像するのも恐ろしい。フランスでは今やほとんど役に立たないガラケー、そしてスマホ、タブレット、パソコン、WiFi、USB、まぶしくて踊りを妨げる LED 照明。今回、オフ公演で半人間半機械のようなダンスを見たが、文明に翻弄され機械に操られている我々を表現しているようで妙に納得してしまった。

フランスのアヴィニョン・フェスティバルオフが気に入っている。参加者全てがプロのアーティストで、ほとんどの公演は小さな仮設の会場で一人か少数で演じられている。星マーク数のランク付けもなければ、選抜賞もない。入口にたむろする観客の数で人気の公演かどうかを判断する。今年のフェスティバルオフ参加公演は約 1500 団体、141 の会場に分かれて公演をしていた。A4 で 2cm 厚さの分厚いプログラム誌で時間と会場を調べて自分なりのタイムテーブルを作り公演会場を目指してさまよう。十数か所を除けばほとんどの会場は直径 1.2 km の城壁の中にある。城壁内の旧市街東側に行けば、会場が 50m 間隔ほどで並んでいるので、次々に渡り歩いて公演を見ることが出来る。残念なことに私が公演するガレージインターナショナルシアターは、城壁の西側の壁沿いで、周辺に会場は少ない。わざわざガレージシアターを目

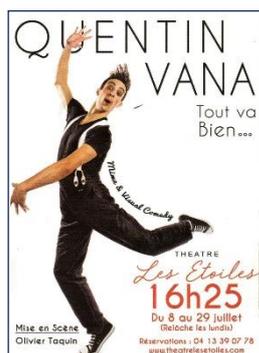


A4,480 ページのフェスティバルオフ・プログラム誌のガレージシアターのページ。左端に衛菊公演掲載。

指して来なければならない。客席は 25 程でホテル内の小さな仮設の劇場である。舞台は黒い板 4m 四方、壁は黒カーテン。私がソロで踊るのにはちょうどいい広さだ。今回、初日の 20 名に始まり集客も何とかこなせたように思う。



公演終了後、お客様と



「すべて順調です」
の葉書大チラシ

ここアヴィニョン・フェスティバルオブ参加公演は、濃密で緻密で、なぜここまでできるのか、なぜここまでやるのか、一体何回この公演をこなしてきたのか、腕組みしながら見入ってしまう。一つとして手抜き公演などない。小さな会場で、延々と芸を披露する。このアーティスト達と渡り合うには一体どうしたらいいのか、1997年から続けている海外フェスティバル参加公演の間中考え続けてきた。とにかく積み重ねしかない。稽古と工夫、自分にできることはそれだけ。ここでは全ての公演が各自のオリジナルで、模倣などない。

何気ない日常を切り取った若い男性のパントマイム「Tout Va Bien…すべて順調です」は、口、目、眉、頬、の表情が次々に体と共に変わり、いったい彼の本当の顔はどれなのか、判別が難しい程だ。宅急便を題材にした公演「Vole!盗まれた!」は、依頼された荷物の箱をたたき、鼻を上下に動かして臭いをかぎ、揺らして中身を調べ、送り先を確認する。ある箱に人間と同じほどの顔の人形が入っていた。体は布のみである。腹話術で人形と丁々発止のやり取りをし、身体を張って人形と戦う。人間と人形、声音や表情で人と人形が交じり合う。人形が入っていた箱があまりにも年季が入り擦り切れていて、演者とこの作品との長い付き合いを感じた。また、ダンス「Relative World 相対的な世界」では1時間延々と男女二人の音楽に合わせ、息を合わせた踊りが全く途切れず、少しずつ変化しながら続いた。

日本では、言葉で説明できる何かを問われる。一体その作品で何を表現したいのか、何を言いたいのか、出演者は何者なのか、単調で内容がない、などと批評され、創作作品と長い年月を経て洗練された古典作品とが並び評される。創作は未熟、という姿勢に悩まされ続けてきた。海外公演を始めたきっかけである。しかしここに来るとそのようなことはもうどうでもよくなる。全ての公演が創作である。ここでは具体的なメッセージが作品で表現されているかより、自分が作品に対してどれだけ誠実に真剣に時間を掛けて向き合ったのかのみが問われている。

こんなに様々な公演があるのに、不思議なことにダンス公演は、ある流行がそれぞれの年を支配しているように見える。オールヌードが多い時もあれば、パッションという表現が使われる暴力的な公演が多い年もあった。今年は、男性が女性を補佐する公演はほとんどない。男性も女性も同じような服と動きで、性差は見当たらない。ダンスから男女の区別は排除さ

れてしまった。私が見た 10 のダンス公演の内フラメンコを除く 9 つの公演では、主役はなく、ダンサーは皆対等で男性女性特有の表現もない。黒い服装で数名が少しずつずれながら態勢を変え、形態を変えていくダンスが多い。そしてふと気が付いた。私が今年 5 月にリサイタルで発表した「宙をゆく」という若柳慶次郎さんと踊った作品は、ジェンダーフリー（性差からの解放）と二人が別々に動きながら時々振りが重なり、人は違って同じであることをコンセプトに創った。ダンスの本場ヨーロッパでの価値観、遙か東の果てにいる自分がその潮流の中にいるなど想像もつかなかった。

今回フェスティバルオフは 7 月 7 日～29 日、インは 5 日～25 日に行われた。今年は自分の公演がその内の 9 日間のみで、滞在も 13 日間と少なかったので、フェスティバル主催のインはダンス公演 1 つしか見ることが出来なかった。インは歴史あるお城や教会で重厚な雰囲気のある会場で行われ、客席も多く、照明、スタッフ、アーティスト全て一流の人々を厳選して上演される。雰囲気ある照明、教会の壁に映る美しい映像、真っ白なリノリウムを敷き詰めた広い舞台、存在感ある歌手や演奏者、ダンサー達。でも、私には狭い仮設の舞台で必死に演じられるオフ公演の方がなぜか魅力的に感じる。作品に掛ける情熱と理解、愛情、一体感、稽古量がオフの方が勝っているような気がしてならない。

私の公演は 3 つの章からなる「蓮花の匂うあたり」。2020 年のアヴィニョン・フェスティバルを目指し 2019 年に創り、すでに 4 年踊り続けている。稽古しても稽古してもまだまだ足りないものが次々に出てくる。作品との際限のない戦いだ。もうこの作品も今年のアヴィニョンで踊り納めかと思ったら、10 月に東京シャクティスタジオ、来年にモンペリエ・シアター・ボ・アーツ劇場から公演依頼を受けた。モンペリエ公演はフランスまでの渡航費以外、フランス国内での移動費、公演費、滞在費、チケット売上の半分が支払われるとのこと。海外からの公演依頼は 14 回目である。コロナ禍で思うように海外に出られなくなってからは初めてだ。有難かった。モンペリエの劇場プロデューサー・ダミアンは英語が苦手と言う。ネットの翻訳サイトで、フランス語に訳しながらのやり取りが始まった。やはり頼りは文明機器である。

イギリス、カナダ、オーストラリア、そしてフランス、計 25 回目の海外フェスティバル参加公演がシャクティ、広美、奈舟さん、高門寺スタジオ、劇場スタッフ等多くの方々に支えられて終わった。トラブルも多い暑いアヴィニョンであった。



人形劇の路上パフォーマンス



「靴について教えて」
のおしゃべりな靴たち